

三上 誠展

—自己凝視から「宇宙」へ—

主催・会場＝(財)品川文化振興事業団 O美術館

【対談】 嶋田 正 (福井大学学長 三上 誠実弟)・木村重信 (大阪大学名誉教授)

5月13日[日] 午後2時～午後4時

会場＝大崎ニューシティ内 ニューオータニン東京



「F市曼荼羅」 1950年 福井県立美術館蔵

1990年4月28日[土]—5月30日[水]

開館時間＝午前10時—午後6時30分[但し入館は6時まで] 木曜日休館

前期 4月28日[土]—5月9日[水] 後期 5月11日[金]—5月30日[水]

《会期中一部展示替があります。》

入館料＝一般500(400)円/高・大生300(200)円/小・中生100(50)円
(内は20名以上の団体料金および割引入館料)

(財)品川文化振興事業団

○美術館

オ一美術館:JR山手線大崎駅東口下車徒歩1分

東京都品川区大崎1-6-2大崎ニューシティ2号館 TEL. 495-4040

戦後日本画の革新者として、その指針を今も現代になげかけている三上 誠(1919-1972)の、東京での初めての本格的な回顧展を開催いたします。

三上 誠は福井市で幼少年期をすごし、1944年には、京都市立絵画専門学校日本画科を卒業。敗戦直後、若手日本画家とともにパンリアル美術協会を創設し、1949年に、その第1回展を開催しました。同協会は、日本画壇の因習的な体質に抵抗し、社会性を重視して、日本画の膠彩芸術としての根底的な反省と表現の可能性の拡張をめざしましたが、三上は同協会の中心的作家として活躍しました。

しかし、若い頃より肺結核を患い1952年の大手術の後には、療養のため福井に帰郷を余儀なくされ、以後、同地で常に死をみつめながら孤独の制作に入ってゆきます。

在学中より抜群の描写力をみせていた三上ですが、その緊張度の高い作品は、戦後、キュビズム・シュルレアリスム等の影響を受けながら、「F市曼荼羅」のように、外部社会の、そして自己の混乱と希望をふたつながらに表現しようとしたものであります。

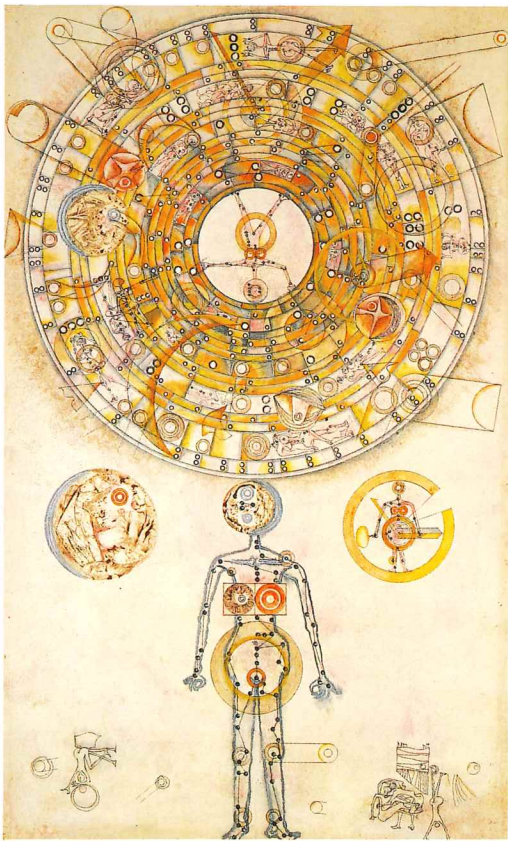
自らの内面的・肉体的傷痕を背景に、有機的な形象が空間に鋭利に突き出し絡み合う画面は、深い心象的光景として凝固しています。また、1959年頃より、石膏に紐を貼り付けたり、烏の子紙の雛を効果的に使用したプロッタージュ風の作品等の様々の技法の拡張を試みました。その後、自身の鍼灸治療に発想し、円を基本パターンにした人体像を中心に「灸点曼荼羅」等の独自の宇宙観を描くようになります。さらに1969年頃からは、幾何学的形態のなかに、突然の幻影のごとく女体が覗く不可思議な心理劇のような画面となり新たな展開をみせましたが、1972年、肺結核を再発し52歳をもってその生涯を閉じました。

三上は、このような多彩な表現をみせながら、一貫して日本画のメディアの再生をこころざし、不断の自己凝視を続け、個人的な想念から出発しつつも、はるかに宇宙論的時空の次元にまで昇華した作品を制作しました。今回の展覧はデッサン、オブジェ等の未公開作品も含め幅広くその代表作120余点を展示することで、その全貌に改めて迫ろうとするものです。

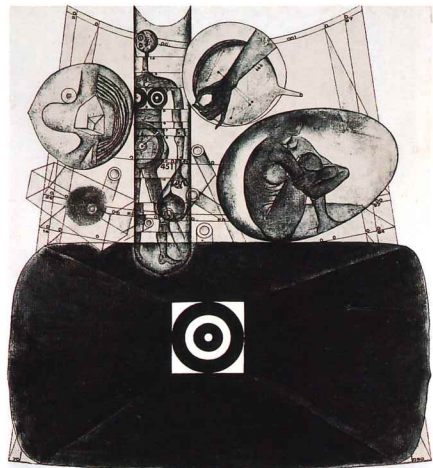
戦後の美術史上、注目すべき運動体であったパンリアル美術協会に関して当館では、すでに「下村良之介展」「大野倏高展」を開催してきましたが、本展はこれまでの展覧とあわせ、現代における日本画の行方をあらためて問う契機となるとともに、三上の現代における再評価を促そうとする試みです。



「自画像デッサン」 1944年
中村正義の美術館蔵



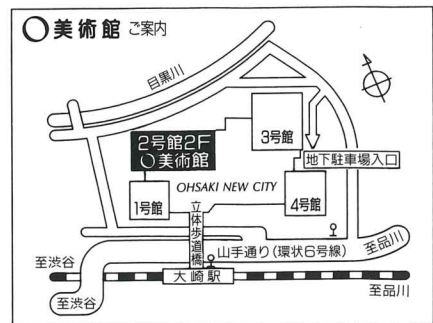
「灸点万華鏡1」 1966年 福井県立美術館蔵



「凍結の生理的54」 1969年 福井県立美術館蔵



「作品」 1960年頃 中村正義の美術館蔵



●交通
山手線大崎駅(東口)下車徒歩1分
東急バス(大井町駅⇄渋谷駅)大崎駅下車徒歩1分

●駐車場
美術館専用駐車場はございません。
お車でご来館の場合、「大崎ニューシティ」地下2Fの
駐車場(有料)をご利用下さい。

(財)品川文化振興事業団
○美術館

オ一美術館 JR山手線大崎駅東口下車徒歩1分
東京都品川区大崎1-6-2大崎ニューシティ2号館 TEL.495-4040